

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア民話の世界①

* イタリアの民話・昔話・伝説 *

剣持 弘子

●はじめに

私は現在、イタリアの民話を翻訳紹介したり、研究したりしています。

今回、民話の魅力をお伝えたくて、この場をお借りしました。イタリアの民話はまだまだ奥が深く、日本に紹介されていないものもたくさんあります。ぜひ知りたい、学びたい、究めたいという方が出てきてくだされば、お役に立ちたいと思っています。

●民話・昔話・伝説とは？

まず、言葉の説明から入りましょう。

民衆によって語り継がれてきたお話を、ひっくり返して民話といいます。そして、その中で、架空のお話として語り継がれてきたものを昔話といい、実際にあったこととして伝えられてきたものを伝説といいます。

これらはさらに細かく分類されますが、ここでは、より一般的でわかりやすい言葉で紹介するつもりです。

また、近年、現代民話という言葉が使われるようになりました。体験談から伝聞話へと成長し、時が経って伝統的な民話に成長していく可能性をもつとも考えられます。笑いや不思議や恐怖など現代民話はとくに若い人に人気があるようです。

【今月のお話コーナー：現代民話】

味噌はパスタか？

私は 1990 年春から 1 年間イタリアに滞在しました。

その間の出来事です。そのころ、日本から味噌を 2 キロ送ってもらったことがありました。ところが、もうそろそろ荷物が届いてもよさそうだったところ、フィレンツェの税関から呼び出しがかかったのです。



【ドゥオーモ遠望】

当時、フィレンツェへのパスタの輸入は禁止されていると聞きました。半信半疑でローマの日本大使館に問い合わせたところ、「きっとフィレンツェだけの法律なのだろう」とそっけないお返事で、それ以上追究するのはあきらめました。そのころ、フィレンツェの町には数年前に比べて中華料理店がびっくりするほど増えていました。その分、イタリア料理店がつぶれたということでした。出店に成功した中国人たちが、本国から同族を呼び寄せているという噂もあり、そのことに神経をとがらせた当局が、パスタの輸入禁止という措置をとったとしてもおかしくないことに思われました。ちな

みに、その成果か、フィレンツェの中華料理店のめん類は、焼きそばも汁そばもすべてスパゲッティが使われていました。

さて、呼び出しを受けて、恐る恐る税関に出向き、ことの次第を確かめてみると、税関吏は荷物の品名を指して、これは法令違反だというようなことを言ったのです。荷物は息子が出してくれたのですが、荷物の品目には、英語で soy bean paste と書かれていました。辞書で調べてみると、たしかに味噌のことでした。どうやら、これが引っかけたようです。

フィレンツェの税関のお役人はこの文字を指して、しきりに「パスタ、パスタ」と言い張ります。ペーパをパスタの複数と理解したわけです。

味噌は日本に戻って行き、ふたたび、(japanese foods) と記入しなおされて無事に私の元にとどきました。



【フィレンツェ中央市場(肉売り場)】

●物語はどのようにして生まれたのか？

ここで、人類がどうやって物語を生み出してきたかを想像してみましょう。

私は、その過程を、一人の人間が生まれてから成長していく過程になぞらえて想像してみることにしています。

子どもは、生まれてから、少し言葉をおぼえると、まわりのものを見て、「これはなに？」「あれはなに？」と質問をはじめます。もう少し大きくなると、「どうして？」という質問が加わります。そして、それらの問いに大人が答えてやります。大人にもすべてわかっていることばかりではないでしょうから、そこには大人の想像力が加わります。

そのうち、子どもは成長してくるにつれ、遊び心

が芽生えて、大人の説明の中の嘘も承知で、お話として楽しむようになったことでしょう。

大昔の人間も、嘘を嘘としてお話を楽しむことができるようになると、お話の上手な人が出てきて、他の人たちに語るようになったことでしょう。

伝説は、場所や、人物、物、現象など実際にあるものを説明し、それを本当のことだと信じるのが要求されます。

昔話は、それに対して、出来事を架空のこととして楽しむお話です。「昔むかし、あるところに」と、時も場所も特定しないのがふつうです。主人公も、ふつうは名前がありません。イタリアだと、王、王妃、王子、王女、若者、娘などで、名前があったとしても、ジョヴァンニ、マリーアなど、よくある名前です。どこのだれと特定はできないのが一般的です。

●職業的な作家の誕生と昔話

さて、文字のない時代、昔話にしろ伝説にしろ、お話は語り継がれることによって継承されてきました。さらに人が文字を使うようになると、それらの話を書きとめる人が出てきます。また、職業的な作家が生まれてくると、語り伝えられてきた物語も、ときに作家によって洗練されたり、装飾されたりすることもあったでしょう。

けれども、そのことによって、物語を語り伝える人が途絶えたわけではなく、時には素朴な元の姿のまま、そして、時には作家たちによって膨らんだ話を吸収して、自分のものとしてあらたに語り継ぐこともあったでしょう。

いずれにせよ、人々が語り継いできた架空の話を、私たちは「昔話」として受け継いできたのです。

ところで、昔話と文学作品の違いは、耳で聞く話と目で読む作品というところにあります。耳で聞く物語は、一本の線の上を歩くようにまっすぐ進みます。そうしないと、頭の中で、筋を追うことがむずかしくなるからです。昔話はいつも一本の道のうえを進む、これが、耳で聞く昔話が、聞く者の頭の中にすーっと入ってくる大きな理由の一つです。一方、作家たちは、物語をより魅力的にしようとして、何本もの道に枝分かれさせ、話を複雑にすることがあります。

●民話とくに昔話はどうやって伝わってきたのか 伝承と伝播

親から子へという縦の伝承だけでなく、人々がさまざまな動機で移動することが多くなると、物語を運んで来たり運んで行ったりすることがふえます。それらが、受け入れやすいものであれば、人々はそれを自分たちのものとして、レパートリーを増やすこともあったでしょう。そういう人たちのなかには、旅の職人たちがいたことが知られています。もっと時代が進むと、書物によってひろまった話も出てきたことでしょう。このように横にひろがっていくのが、物語の伝播です。とくに昔話は、伝播するとき、話をそっくり受け入れるだけでなく、モチーフだけを受け入れることもあります。そうやって、似ているけれど、少し違うという話も出てきます。

つまり、大昔に芽生えたお話の種が、親から子へと伝承されたり、ときには国境を越えて伝播したりして受け継がれてきたのです。

民話、とくに昔話はそうやって、世界中に広まっていきました。もちろん、他の地域と交流がなかったり、あまりにも環境の異なる地域では、いつまでも独自の話を守りつづけてきたようです。

日本も、かなり独自の話をもっていますが、それでも、中国やヨーロッパなどの影響は、少なくないようです。そういう影響関係を探る研究は、まだまだ余地を残しており、今後が期待されます。

今回は、『昔話を訪ねる旅1』です。



【当時のフィレンツェ中央市場肉売り場】

(イタリア民話研究家)

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

10月より開講の秋期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

- 京都本校：日本イタリア会館
9/26(金) 11:00～12:30
9/27(土) 11:00～12:30
- 四条烏丸：ウイングス京都
9/30(火) 19:00～20:30
- 梅田：大阪駅前第4ビル
9/30(火) 11:00～12:30
9/30(火) 19:00～20:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

- 京都本校：日本イタリア会館
9/27(土) 11:00～12:30

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

- 京都本校：日本イタリア会館
10/1(水) 13:00～14:30

イタリア文化セミナーご案内

オペラ・ファンなら歌詞まで楽しもう！

「歌曲&アリアの韻律」

イタリア歌曲やオペラの歌詞は詩で成り立っています。イタリア詩の基本的な韻律形式をいっしょに学んでいきましょう。ポップスを含めてイタリアの歌に興味のある方はどなたも、この機会にぜひ歌詞の韻律に親しんで下さい。イタリア語はできなくても大丈夫です！

講師：鈴木信吾 先生（東京音楽大学教授）

日時：9月6日（土）10:30～12:30

場所：日本イタリア会館 京都本校

参加費：維持会員 500円

受講生・一般 1,500円

* 詳細は事務局までお問合せ下さい *

ローマ滞在日記②

ファーレンハイト 451

二宮 大輔

興味深い話を耳にした。京都で書店を個人経営する若い世代の人々のほとんどが、別の仕事を掛け持ちしているらしい。書店だけでは首が回らないのだ。真偽のほどはわからないが、この裏話を聞かせてくれたその人が、まさに小さな古書店の主人だったので、そういうものと納得させられた。過去から続く文化活動がハイテクノロジーによって駆逐される構図は、書店に限ったわけではない。レコード店、名画座など、安くて便利なインターネットショップに顧客を奪われ廃業に追い込まれる職種は山ほどある。情熱を持った若い世代が、新たに店の立ち上げを試みるものの、結局は他で稼がないと経営もままならないというのが現状だ。

店を立ち上げるわけではないが、私も個人経営の書店や古書店に愛着を持っており、それらが滅び行く様を断腸の思いで眺めている。だが、冷静になって考えてみると、なぜここまで書店の存続に固執しているのか、自分でもよくわからない。古書店でしか手に入らない絶版を探しているわけでもないし、同じ商品が手軽に、しかも安価で手に入るのなら、インターネットで十分ではないか。カメラが発明されて似顔絵画家が消えたように、火力発電が普及して炭鉱が閉山したように、書店はもはや絶滅の道を歩んでいる。それは現代社会の運命として受け入れるしかないのではないか。それなのになぜ私は、書店が存続すべきだと直感的に確信してしまっているのだろう。

海外に目を向けてみると、書店という絶滅危惧種を国が保護するケースも見受けられる。今年の六月末、フランスで書店を守る「反アマゾン法」案

が議会で可決されたのは記憶に新しい。共同通信の記事によると、国内の小規模書店を守るために、無料配送の禁止や値引きの制限などを定め、アマゾンを始めとするグローバル企業の攻勢を押さえ込むのが同法の目的とのことだ。フィリペティ文化・通信大臣も「フランスの書店網は言論・出版の多様性を保証するもの」と主張している。法律の内容に賛同する一方で、大臣の主張は私を感じた疑問の答えとして何か物足りない。もちろん、個性豊かな小規模書店が多様性を生み出していることは否定しないが、アマゾンのウェブサイトで見られるレコメンデーション機能や、カスタマーレビューなどは、圧巻の高性能だ。これらがさらに発達すれば「言論・出版の多様性」もネット上で十分に保証されるのではないだろうか。書店が存続すべき本質的な理由は「言論・出版の多様性を保証する」以外にもある気がする。ちなみに、この法律が施行された現在、フランスのアマゾンは無料だった配送料を1セント(約1.4円)にすることで応戦している。規制したところで、グローバル企業の攻勢を押さえ込むのは、やはり容易ではなさそうだ。

ここで話をイタリアに移そう。チェーン店やグローバル企業を嫌い個人経営を尊重すると言われるこの国で、アマゾンのサービスが開始されたのは、日本、フランスから10年遅れの2010年。翌年9月には、さっそく「値引き潰し法」(Legge ammazza-sconti)ことレーヴィ法が施行された。「イタリアにとって、本はもっとも重要な文化的市場であり、明確な規則を必要とする」と主張する民主党議員リカルド・レーヴィが推し進めた法律で、新刊本の大幅値引きを禁止するために、上限を15%と定めたものだ。日本では、書店に義務づけられている再販売価格維持契約によって新刊の値引きは厳格に規制されているし、先述の記事によるとフランスでも、値引きの上限は5%だという。上限15%でもとんでもない数値に思えるが、より

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

自由に値引きを決められるイギリスなどの例もあり、レーヴィ法に対して「出版業界を停滞させてしまう」など、批判の声も相次いでいる。さらに、図書館が新刊購入時に認められていた値引きも規制されることとなり、今度は図書館に本が不足し始める。そうすると図書館が買ってくれないから中小出版社の本が売れなくなる。中小出版社や書店を守るはずの法律が、負の連鎖を生み、本と書店を巡る状況は悪化させているのだ。

そんな中、イタリアの書店の実情はどのようなものか。ちょうどレーヴィ法が施行された頃、ローマの中心地カンポ・デ・フィオーリ(Campo de' fiori)にある個人経営店「ファーレンハイト 451」(Fahrenheit 451)取材する機会があった。カンポ・デ・フィオーリといえば、朝は市場、夜は盛り場となる賑やかな広場で、ローマでも有数の観光地。その広場のパブやレストランの並びに「ファーレンハイト 451」はひっそりと顔をのぞかせている。



【ファーレンハイト 451 の入口 写真:エルネスト・テデスキ】

店名はSF作家レイ・ブラッドベリの1953年の小説『華氏451度』から拝借したものだ。華氏451度というのは、紙が自然発火する温度。小説の世界では、言論統制のためにあらゆる本を読むことが禁止されており、人々の隠し持っている本は見つかり次第、当局によって燃やされてしまう。名作と呼ばれる文学作品の数々が燃やされる場面は暴力的であり、儚くも美しい。つまりこの作品は、本の消滅をテーマにすることで、逆説的に本への愛情を表現している。カンポ・デ・フィオーリの書店も

また、並々ならぬ本への強い思い入れから「ファーレンハイト 451」と名付けられた。その入口には、敬意を払うべく、各国で刊行された同小説がコレクションとして陳列されている。ぎっしり本で埋め尽くされた店内。本棚に並ぶのは、古書を中心に、映画、演劇、写真など、視覚芸術分野の書籍だ。絶版になったオペラの台本や、1930年代のロシア映画の専門書など、愛好家のつぼを押さえた品揃えで人気を誇っている。

とはいえ、書店の個人経営はやはり厳しいようだ。「私たちは恐竜みたいなものね」と店主のカティアさんはこぼしていた。滅び行く自らの運命を悟り、施行されたばかりのレーヴィ法にもさして期待していないとのことだ。目下の問題は「若い世代の客足が伸びないこと」。店の常連はだいたい三十歳以上。それも本を買うだけでなく、彼女や他の店員たちと友達感覚でしゃべるのを楽しみに訪問するらしい。「書店とは知識と文化を共有できる空間なのに、若い世代はそれを理解してくれない」とカティアさんは嘆く。



【ファーレンハイト 451 の主人カティアさん
写真:エルネスト・テデスキ】

この話を聞いてエッセイスト須賀敦子の著書『コルシア書店の仲間たち』を思い出した。戦後から1960年代にかけて、元レジスタンス運動の活動家数人がミラノの中心地に開いたコルシア書店を舞台にしたエッセイだ。須賀敦子はその場所で若き日々を過ごし、後に夫となるベッピーノほか、多くの知識人と出会う。その面々は作家、記者、弁護士、教師など。一日の仕事が終わる頃、皆で

書店に集まり、思想や宗教の垣根を越えてさまざまな議論を繰り広げる。まさに理想の文化空間だ。カティアさんの「ファーレンハイト 451」にもかなり似た雰囲気を感じられる。事実、取材中にも、複数の友人が彼女に会うために書店に入ってきた。

自分のイタリア留学を省みると、積極的に探し求めていたわけでもないのに、そのような場所に巡り合えた気がする。書店だけでなく、人が入り混じり気軽に話し合えるバルや映画館や劇場が確かにあった。中でも印象的だったのはインディペンデント映画の監督が経営する映画館だ。上映するのはもちろん自分の作品。上映後は観客である私たちがチケットカウンターにいる監督に感想を述べに行く。作品によっては、政治や教会のあり方を批判するものもあり、感想を言うはずが、白熱して言い争いになることもしばしばあった。話を切り上げて帰ろうとすると、「今度はこれを観てみる」とばかりに、監督が自作映画の収録されたDVDをお土産に持たせてくれた。

私のお粗末なイタリア語能力で高尚な議論を繰り広げるのは到底無理だったが、実際に人と会って、本や映画についての意見や感想を言い合うのは非常に楽しかった。実感を伴う行為であり、その内容をいつまでも強く覚えている。なによりそれは、インターネット上のヴァーチャルな世界では不可能だ。留学経験者ならではの偏見なのかもしれないが、今の日本には人と出会える場が足りないと感じる。考えてみると私は、帰国した今でもコルシア書店のような場所を求めている。そして、日本のどこかに理想の文化空間はないかと突き詰めていくと、流行りのカフェやコワーキングスペースではなく、やはり思想や学問の香りが染み付いた小さな書店に行き着いた。いちばん理想に近いこの場所に、勝手ながら自分の望みを託したいという気持ちになった。個人的には、時代の流れに抗して書店が存続すべき理由はそこにあると思っている。

最後にもう一度「ファーレンハイト 451」に話を戻そう。この書店があるカンポ・デ・フィオーリ広場の真ん中には、ジョルダナーノ・ブルーノ像が立っている。1600年にこの地で火刑に処されたドメニコ

会修道士だ。罪状は独自の宇宙論を展開し、カトリック教会から異端とみなされたから。16世紀にあつてコペルニクスの地動説を擁護した奇異な思想家ブルーノ。その著作はすべて禁書となったが、外国を中心にこっそりと出回り、彼の再評価につながっていく。この史実から、ものごとを考え、議論するきっかけをくれる本の浸透力をひしひしと感じる。ゆえに「ファーレンハイト 451」のある広場に、うつむき加減のブルーノ像が立っている光景は象徴的だ。独自の説を唱え非業の死を遂げた作家が、絶滅危惧種の書店の未来を無言のまま伺っている。ブルーノの視線の先には何があるのか。便利さやコストパフォーマンスではない書店の意義を、私たちは改めて考えるべきではないだろうか。



【ジョルダナーノ・ブルーノ像】

[図版の出典]

http://it.wikipedia.org/wiki/Giordano_Bruno

(元当館語学受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>